

題目 善意の連鎖—恩送り—は存在するのか：実験ゲームを用いた検討

氏名 小淵 真理

指導教員 竹澤 正哲

恩送りとは、他人から援助されたのちに直接的な返報の替わりとして第三者に協力する行動であり、現実社会において複数の事例が報告されている。一方で、恩送りは物質的な利益を生まないため、理論的に進化しづらい行動であるとの指摘があり、その存在の有無自体についての議論もある (Novak & Roch, 2007 ; Gray, Ward & Norton, 2014)。そこで本研究では、実験ゲームによって恩送りを観察しようとした Gray et al. (2014) の研究に2点の変更を加え、恩送りの存否についての検討を行った。1点目は、Gray らが用いた独裁者ゲーム (実験者から元手を与えられた参加者が、そのうちいくらを相手に分配するか決定するゲーム) についてである。そもそも恩送りは、与えられた資源を相手と分け合うというよりも自らが損をして相手の利得を増やそうとする行動であるため、恩送りを説明するために独裁者ゲームを用いるのは適切ではなかった可能性がある。そこで今回は恩送りの構造により当てはまる贈与ゲーム (提供者がコストを払うことで受け手の報酬がそのコストの2倍に増えるゲーム) を行った。変更点2点目は、今回の贈与ゲームは、各参加者が順々に決定を行い連鎖的に繋がっていく状況であるため、参加者自身による提供だけでは受け手の報酬が確定されないことを明示したことである。これは、Gray らの実験においては連鎖状況であることが明示されていなかったために、参加者は二者間のみの金銭の分配であると認識し、元来人に強く存在する二者間の平等分配の概念 (Messick & Schell, 1992) のもとで、受け手に平等に分配すること以上の利他行動を起こさなかった可能性があるという問題があったからである。以上のような変更によって、本研究の贈与ゲームでは独裁者ゲームを行った際よりも恩送り行動が見られ、さらに提供者から利他的な額を受け取るほど第三者への提供額も増えると予測された。実験の結果、仮説を支持するように恩送り行動が観察され、受取額が増えるほど第三者への提供額も増える傾向があった。しかし利他的な提供額を受け取った人であっても、第三者に同程度に利他的な額を提供をするわけではないという結果も見られた。このように、参加者が第三者に渡す金額を受取額よりも少なくしていくかぎり、連鎖状の恩送りは進化せずにやがて消滅するだろう。今後は、このような弱い現象である恩送りが現実社会で実際に観察されるのはなぜなのか、恩送りの持つ進化的な意味についての検討を深めていく必要がある。